

RECURRENCE RATE OF CYSTOID MACULAR EDEMA WITH TOPICAL DORZOLAMIDE TREATMENT AND ITS RISK FACTORS IN RETINITIS PIGMENTOSA

下川, 翔太郎

<https://hdl.handle.net/2324/4784480>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名： 下川 翔太郎

論文名： RECURRENCE RATE OF CYSTOID MACULAR EDEMA WITH TOPICAL DORZOLAMIDE TREATMENT AND ITS RISK FACTORS IN RETINITIS PIGMENTOSA

(網膜色素変性に合併した嚢胞様黄斑浮腫に対してドルゾラミド点眼を用いて治療した場合の嚢胞様黄斑浮腫再発率とその危険因子)

区分： 甲

論文内容の要旨

目的： 網膜色素変性合併嚢胞様黄斑浮腫に対するドルゾラミド点眼治療後の再発率とその危険因子について検討する

方法： 九州大学病院に通院する網膜色素変性（RP）患者を後ろ向きに調査した。嚢胞様黄斑浮腫（CME）を合併し、1.0%ドルゾラミド点眼で治療効果が得られた患者を対象とした。点眼加療開始日をベースラインと設定し、経過観察期間中は点眼加療を継続した。CMEの再発の有無（再発の定義は中心窩網膜厚（CST）が前回受診時より20%以上増加していること、もしくはCSTがベースラインを超えることとした）を各受診毎に評価した。CME再発の危険因子についてはCox比例ハザードモデルを用いて解析を行った。CME再発率はKaplan-Meier法を用いて計算した。

結果： CMEを合併したRP患者のうち、40名がドルゾラミド点眼に対して治療効果を示した。平均3.9年の経過観察期間で14名の患者にCMEの再発を認め、その再発率は1、3、5年でそれぞれ15.6%、34.7%、48.7%であった。ベースラインのCSTが高い症例がCME再発のリスク因子であった（ハザード比 1.11、95%信頼区間1.05-1.18、p値=0.0004）。

結論： 網膜色素変性合併嚢胞様黄斑浮腫の再発は、経過とともに増加する。点眼加療開始時のCSTの高さは、CME再発のリスク因子であった。